別所憲法９条の会 たより

2025年9月 第204号

戦後80年の今年、8月には数多くの戦争に関するテレビ番組が放映されました。そのような中、8/16に次の番組を視聴しました。

TBS報道特集　▽治安維持法100年
NHK Eテレ　▽音楽はかつて“軍需品”だった ～ 幻の楽譜に描かれた戦争 ～
ETV特集　▽昭和天皇終戦への道（東郷茂徳外相の手帳が全文開示され、終戦の舞台裏が明らかになった。）

今、戦争で苦しむ人たちの映像を見ることに皆さんも耐え難く感じておられるのではないでしょうか？　日本の戦争が終わってから80年、あの日本の戦争は何だったのか？　避けることはできなかったのか？　この夏に放映されたテレビ番組も参考にして話し合ったらいかがでしょうか。

9月の例会

日 時　9月22日(月)
13:30～16:00
お待ちしております

場 所　長池公園自然館 工作室

参加費　300円

・731部隊元少年隊員の清水英男さん(当時14歳)の証言ビデオ上映

うそつき呼ばわりされても、731部隊の「本当のことを語る」94歳の元少年隊員

・証言インタビューを撮られた、731部隊展実行委員会の五井信治さんにお越しいただき、お話をうかがいます。

堀之内駅前での宣伝

9/22(月)
10:00～11:00
核兵器禁止
大軍拡・戦争への道反対

八王子アクション

9/13(土) 10:30～
JR八王子駅前

9.19国会前大行動

9/19(金) 18:30～
国会正門前集会
安保法制強行採決から10年

講 演

なぜ戦争になるのか？
ダニー・ネフセタイ氏
非戦を訴える
元イスラエル兵

10/26(日)
10:00～12:00
北野市民センター8F
京王線北野駅前
参加費:500円
チラシは→

映画『黒川の女たち』を観ました

映画の公式サイトへ

この話は聞いてはいましたが、この度の映画で改めてあの戦争で日本のやった事、加害の広さ・深さを再認識しました。

◆何のために国民を満州に送ったのか？　◆何故「満蒙開拓団」という名前を使ったのか？
◆政府の政策に疑問を抱かず大陸に渡った人々がなぜ苦難を強いられなければならなかったのか？

映画の中で何回も話されていた。「わたしたちは開拓はしていません。中国の人たちの家畑を取り上げて暮らしただけです」と。開拓団は元々、軍の食料補給とソ連からの襲撃に備えた盾(軍事目的)だった。また、その現状をソ連軍は知っていたという。

若い女性を犠牲にして集団自決を避け、その結果帰国を果たした開拓団の皆さんの苦しさ、そんな中でも事実を伝え続けた女たち、そしてそれを理解し、「生きていてくれてありがとう」と言う孫たち、つなげてゆく事の大切さとすばらしさを学ぶ。

戦後生まれの遺族会の人たちは女性たちの声を真摯に受け止め、その実態を知らせるために乙女の像のそばにレリーフを建立した。その前で被害女性たちに深く詫びる。国の姿勢はそれとは異なるがため、今後の日本に不安が募る。

接待を強いられた安江善子さんの詩

「傷つき帰る 小鳥たち 羽を休める 場所もなく 冷たき眼 身に受けて 夜空に祈る 幸せを」

自分の不勉強を身に沁みながら、二度と戦争してはならないと深く考える大きな時間でした。(関)

七三一部隊を知っていますか？

七三一部隊とは、大日本帝国陸軍の研究機関のひとつで、関東軍防疫給水部が正式名称。秘匿名称である満洲第七三一部隊の略称だが、医師で陸軍大佐であった石井四郎（最終階級は陸軍中将）が率いたことから、部隊長の名を冠する陸軍の慣習により「石井部隊」の名で呼ばれることも多い。

1925年に生物兵器、化学兵器の使用を禁じる《ジュネーブ議定書》が締結された。石井四郎（1892～1959年）は、それほどまでに脅威かつ有効であるなら、これを兵器化しない手はないと考え、陸軍省や参謀本部を説得して回り、1932年に防疫研究室が設立される。1936年の関東軍防疫部を経て、満洲ハルビンの南方郊外、平房に新施設ができたのが1940年。総合医学研究施設ではあるが、満洲に置いたのは、日本国内ではできない人体実験を行うためである。石井四郎の母校である京都帝大医学部から、若くて優秀な病理学者、解剖学者、細菌やウィルスの研究者らが集められた。

ペスト菌に感染すると、凍傷になると、銃弾を浴びると、人体組織はどうなるのか、どこまで持ちこたえられるものなのか。イペリット、ホスゲン、ルイサイト、青酸ガス、一酸化炭素ガスの効力はいかに。浙江省の都市にチフス菌やコレラ菌を散布するものの、成功しなかった。しかしペスト菌に感染したノミを投下したところ、こちらは成功。実験を兼ねた実戦での使用である。

平房での実験には、捕虜やスパイ容疑で拘束された朝鮮人、中国人、モンゴル人、米国人、ロシア人、その他一般市民、女性や子どもを「マルタ（丸太）」の隠語で呼び、生きている人間を材料にした。その数は3,000人以上とされる。生体解剖は、一日に2～3体、多い時は5体とか、年に100程度で総数1,000未満など、数は定かでない。解剖班に関わった胡桃沢正邦技手によれば、700から800と証言している。1945年8月9日、ソ連軍の侵攻直後、平房の施設は証拠隠滅のために爆破された。生存していた40人から50人のマルタも殺害されたという。

生物・化学兵器の使用、捕虜・民間人で人体実験、いずれも戦争犯罪である。捕虜虐待の罪で多数のBC級戦犯が裁かれる中、石井部隊の誰一人罪に問われることがなかった。実験データの提供と引き替えに、米国側が免責したのである。石井四郎は公職追放だけですんだ。他の隊員たちも、戦後は京都大学などに復職したり、日本ブラッドバンク（後のミドリ十字）を設立するなどしている。彼らによる生物・化学兵器の研究は米国に継承され、その後の朝鮮戦争、ベトナム戦争で活用されることになった。

七三一部隊の存在は、戦時中は秘密組織であるから当然なのだが、戦後の占領体制下でも長らく伏せられていた。世に知られるきっかけは、森村誠一（1933～2023年）が1980年に著した『悪魔の飽食』だろう。同部隊を告発するドキュメントである。この時、著者は南信州に帰郷していた解剖班技手の胡桃沢正邦に取材するも、その名前を出していない。胡桃沢正邦が平房から持ち帰った解剖器具が、飯田市平和祈念館に展示されており、平房の跡地は《侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館》となっている。

なお、1948年に起きた《帝銀事件》についても、七三一部隊と陸軍登戸研究所のつながり、さらにはGHQの関与を疑う声があり、松本清張（1909～92年）が『小説帝銀事件』の中でとりあげた。